

## 第27回農民の健康会議に出席して

富山県農村医学研究会 豊田 文一  
富山県厚生連健康管理課 轡田 善彦, 長谷川 登

昭和61年11月7日、東京農協会館、国際会議室において第27回農民の健康会議が開催され、私たちはこれに出席し、会議に討議された内容の概略を報告したい。

今回のテーマは「地域活動でまもる組合員の健康なくらし」であった。この「なくらし」の中心として農村における高令者対策が取りあげられ、高令者社会のうちでの農協自体の在り方について論議が交された。

先ず基調報告として全農協中央会芽野常務理事より第17回全国農協大会の決議の実行、すなわち「農協生活活動方針に示す。健康を守り向上させ、高令者の生がいをづくり次代を育てる活動など」の推進、「農協健康管理活動の必要性」で、このことは組合員、地域農協にとつて直接の収支効果は期待できないが、農協と組合員の連繫に効果的に働き、農協事業の拡大を計る上に有効な施策と考える。

また「農協健康管理活動の重点内容」として健康管理、高令者への対策活動として、全組合員の「人間ドック」、これは受益者負担として農協貯金の方法を取り、それと同時に健康教育を推進する。とくに厚生連未設置の15県に対して、この観点より、その設置を呼びかける。とくに今後の対策として不健康な高令者対策、それと組合員に対する介護技術の教育、また行政機関との連繫を密にし、一人ぐらしの老人、寝たきり老人に対し、ボランティアを育て、「託老所」の設置、介護ケア、デイ・ケアなど農協の健康管理の重点的施策として推進する。

第2は、若月佐久総合病院長より「農協の健康管理活動を推進させるために」として、冒頭に農協中央会元会長の宮脇朝男氏の述べた「人生の要諦は、生命と金のバランスをどうつけるか、ということに帰するのでないか。生活は健康に通じ、これはまた生活に属する。ところが他方の金は所得に通じ、生産に属する。片や健康または生活、片や金または生産——この世は結局この両対立物の闘いで、自分としては、この両者のバランスをどうするか、どちらにウエイトをおいて生きるかという結論になる」を引用し、人生は結局健康と生産の対立に他ならぬという。つまり農民の健康を論ずるならば、結局金をとるか、健康をとるか生き方の問題になってしまう。つまり「家庭生活は健康か」に集約される。さらに「母ちゃん」の役割の重要性を論じた。昔のように「母ちゃん」は子供にも、夫にもそして年寄りにも心のこもった面倒をかけてやれない時世となっている。このことは特記すべきことで、「健康生活」よりも「金もうけ」への志向が今日的定着と思われる。今日の農協なども「生産」だけに眼を奪われて、一番大切な農家の「健康生活」への配慮が不足しているのではないか。

また高令化による「寝たきり」、「痴呆」「独居」をどうするか、これに対してできる限り「在宅療養」、にも役立つデイ・ケア（昼間収容）やショート・ステイ（短期間収容）にも力を注がねばならない。これも地域社会と密接な連絡をとるよう農協組織も、このような

生活活動を重視すべきである。

第3は秋田県横手市農協健康推進委員会の高橋会長よりその活動状況、健康貯金による精密健診を中心として「自らの健康は自らの手で」をテーマにし、年会費300円、助成金農協より150万円、横手市より18万円、会員61年度1,323名（組合員数2,054戸中1,041戸加入）、健診受診率95%、かつ健診結果報告会、再検者追跡、栄養調査、健康推進大会など行っている。また特殊健診は農薬共同防除班健診、貧血、肥満に対する栄養調査及び塩分測定、体力測定、営農生活（行動及び環境）調査、事後報告会、部落座談会など行ない、毎月4支所で健康相談室を開催し勢力的な健康管理運動の展開を報告した。

次は実践報告として東京都練馬区農協参事長谷川氏の「献血運動で守った組合員のいのち」である。練馬区は古来大根の産地であったが、大干ばつやバイラス病により致命的打撃を受け昔日の面影はなく、現在キャベツ、カリフラワー、ブロッコリ、馬鈴薯、大根の栽培を行っている。組合員13万5千という巨大農協である。また都市農協として緑化推進、園芸センター、賃貸住宅事業（農住マンション）にも積極的に取り組んでいる。

昭和57年、健康管理委員会が発足し、58年保健婦を採用した。これは農協内の高齢者の健康管理と一般相談活動、さらにヘルスケア研修会などの保健活動を受けもっている。このため準会員の評価も大きく、預金などの信用事業も活発になってくる等の変化もみられた。

特筆すべきことは全組合員総意のもとで練馬農協献血共済会の設立で、多様化する社会情勢の変化のなかで、輸血の必要性を認識し、赤十字血液センターその他の関係団体と協議、これは相互扶助の精神に基づいたものである。毎年2回（2月、9月）農協の各本支店（8店舗）を巡回会場とし、1会場平均700名、昭和61年9月の献血は1,964,400cc、供給し

た血液量301,400ccでこれは全部生血液で、手術輸血450名におよぶ。もちろん病院、患者家族の要望により必要量の生血液の供給を行っている。昭和62年2月には累計1万名の献血者がでると考えられる。

健康管理活動に対しては、情報活動として農協広報（「すずしろ」＝大根のこと）を発行し健康問題のページをとり、組合員に配布、また昭和60年8月より年4回「健康だより」を発刊、組合員、一般取引者に関心をもたせ認識を高める運動をしている。

実践報告3は、信州西山農協峰村企画課長より「表面的な老令化対策ですまされない地域」として人口8,263人の人口のうち65才以上23%、こと農協の地域は10年間に5,000人の人口減少の過疎の辺地で、兼業化とともに村外移住によるものである。これは、①村に若さ、活力がなくなった村の変化、②老夫婦を含めて小家族化という家族生活の変化、③農協が組合員と対応するなかで老人対応の比重が高まった、上記のことについて無策に終ると減びゆく西山の里に変わる。

このため「老令化対策の事業としての訪問活動」このため取り組んだのは一人暮らしの老人に声をかける運動、「おじいちゃん、おばあちゃん、元気かえ」、これがこれらの人々の心の支えとなる。（現在人口8,263人中一人ぐらしの老人、172人、ねたきり老人47人）。

訪問活動は100人余りの職員が、約90の担当地を毎月17日に訪問する。この運動を3年間続けているが、得たものは、①一人ぐらしの老人から「ありがたい」という声が多くなってきた。②村役場、社協、学校などもさらに手をさしのべる施策を講ずるようになった。③一人ぐらしの老人同志がお互いに声かけ運動をするよう変った。

また老人の意向をまとめると、①農協はありがたいことをしてくれる。②一人でいるときびしいときがあり、風呂に入るときも戸をあけて入る。③いつたおれるかもわからない

ので電話ベルが必要だ。④老人用や小家族用の食料パックを考えてほしい。⑤食事メニューまで出してもらってうれしい。⑥一人暮らしに必要なのはたおれたらどうするかである。⑦声かけ運動により組合長始め組合員が老人問題に関心をもつようになった。

また老人と話し合い運動とあわせ、老人の声を聞く「健康学習講座」である。老後を生きぬくための手づくり学習である。そのほとんどは教養課目になっている。

農協事業としての位置づけは二つある。一つは物的のシルバー産業的の事業、端的にいうならば心の運動である。二つめは物的経済的の事業である。65才以上の老人はいうなれば小銭と手間がある。農協の高令者事業として住宅、医療、介護、金融、共済、食品、レジャー等で、これを組織活動として位置づける。

農協は社会事業団体ではないが、「村のよさは村ぐるみのつきあいである」。ことに農協の組織内の婦人部も、このなかに重要な役割をもち、一人暮らし、寝たきり老人の調査やできればボランティア精神をもつことも必要であると思われ、以上のことはきびしさに喘ぐ農協だけに、これらのことは農協運動の基本になるかも知れない。

第4の実践報告は、栃木県黒磯市役所の山口福祉課長で、自治体として「心のふれあう住みよいまちづくり」と題して、在宅福祉サービス活動を中心として述べた。人口50,120人、戸数13,536戸、那須高原、板室温泉を中心とする観光地で、プリチストーンタイヤ工場もあり工業化が進んでいるが、産業は米作と高原酪農である。農家戸数1,033戸、農家平均耕作地2.4ha。

その福祉事業として、高令者が増え老人ホームなど整備されたが入所希望者を入れきれない。それらの人々は矢張り生れ育った土地で、孫や子供や旧知の友達と一語に暮したいと願っている。結局在宅のまま受けられるサ

ービスの充実が一番必要となる。それで一人暮らしや寝たきりの人々の希望は、介護人60%、寝台64%、腰かけ便器91%、福祉電話61%、である。

市の方針として在宅福祉サービスの供給システムとして、第1にニーズ発見システム（定期調査一民生委員）第2はニーズ検討システム（ニーズの検討一地区民生委員協議会）これには民生委員、ケースワーカー、保健婦、社協活動訪問員で構成され2ヶ月毎に開催、第3はニーズ解決システムで福祉協力員（自治会長）、民生委員、老人クラブ、婦人会など、例えば友愛訪問、雑用サービス、他方福祉事務所では、老人福祉グループによる家庭奉仕、日常生活供給所、短期保護サービス、在宅福祉サービス供給委員会（市社協）で給食サービス、ミニ・デイ・サービス、入浴サービスただし民間資源で上記サービスをカバーできない有料サービスである。

とくに強調しているのは「遠くの親戚より近くの他人」というように近隣地域に住む人々の暖かな親しみ深い人間関係をとりもどしお互に協力し合い助けあう地域作りは何より肝要と思うと述べた。

以上冗長に流れたが、会議の概要である。

さて私は以前より、農民とは何かとその定義についていささか疑義をもっていた。かつてこの会議で、その点を質したこともあったが、主催者側のある人が、農民という言葉を出さないと関係団体よりの財政的援助がもらえないという返事がなされた。

しかし今年の会議では、農協生活活動の基本的な面が打ち出され、その実践運動に的がしぼられた。ことに農村環境のなかにある高令者の対策として農協の在り方、施策が論ぜられ、広く考えると厚生連の医療機関の今後の在り方にも関連し、考えさせられる所が多かった。

現在、コメの問題、貿易の自由化などの反対運動が農協の大きな課題となっているなか

で、今回の会議は農協組合員、さらに農村地域の人々のいのちに直結した事柄が討議され有意義であったと感じている。

講演された人々は、真に農協の将来を考え農村の生活に対する農協の在り方について、

今までほとんど触れられなかった点についても有益な示唆が与えられた。ことに厚生連の将来を占う意味でも、実りのあつた集会と評価したい。